

統計検定 1 級 (統計数理)解答と解説 (数理) 略解数理 1

- [1] $E[\bar{X}] = \mu$, $V[\bar{X}] = \frac{\sigma^2}{n}$ であり, 不偏性は

$$E[T^2] = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n E[(X_i - \mu)^2] = \frac{1}{n} \times n\sigma^2 = \sigma^2,$$

$$E[S^2] = \frac{1}{n-1} E\left[\sum_{i=1}^n (X_i - \mu)^2 - n(\bar{X} - \mu)^2\right] = \frac{1}{n-1} \times (n-1)\sigma^2 = \sigma^2$$

より示される。

[2] $\beta_1(\bar{X}) = \frac{\beta_1}{\sqrt{n}}$

[3] $\beta_2(\bar{X}) = \frac{\beta_2}{n}$

- [4] n が大きくなると, \bar{X} の分布の歪度も尖度も 0 に近づき, 中心極限定理により \bar{X} の分布は正規分布に近づく。

- [5] 対数尤度関数の微分により, σ^2 の最尤推定値は $\hat{\sigma}^2 = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \mu)^2$ となる。 μ が未知

のときは, σ^2 の最尤推定量は $\tilde{\sigma}^2 = \frac{n-1}{n} S^2$ となる。

数理 2

[1] 尤度関数の微分により θ の最尤推定量は $\hat{\theta} = X_{\max}$ で与えられる。

[2] $E[X] = \int_0^{\theta} x \cdot \frac{1}{\theta} dx = \frac{\theta}{2}$ であるので, $E[\theta'] = E[2\bar{X}] = \theta$ となる。

[3] X_{\max} の確率密度関数は $g(x; \theta) = \frac{n}{\theta} \left(\frac{x}{\theta}\right)^{n-1}$ となる。また, $E[X_{\max}] = \frac{n}{n+1}\theta$ より不偏性が示される。

[4] $V[\theta'] = \frac{\theta^2}{3n}$, $V[\theta''] = \frac{\theta^2}{n(n+2)}$ となるので, θ'' は θ' より有効である。

数理3

[1] $B(n, p)$ の確率関数で, $\lambda = np$ すなわち $p = \lambda/n$ とすると,

$$p(x) = {}_n C_x p^x (1-p)^{n-x} = \frac{1}{x!} \cdot 1 \cdot \left(1 - \frac{1}{n}\right) \cdots \left(1 - \frac{x-1}{n}\right) \lambda^x \left(1 - \frac{\lambda}{n}\right)^n \left(1 - \frac{\lambda}{n}\right)^{-x}$$

であるので, ここで $n \rightarrow \infty$ として $p(x) \rightarrow \frac{\lambda^x}{x!} e^{-\lambda}$ を得る。

[2] X のモーメント母関数は

$$M_X(t) = E[e^{tX}] = e^{-\lambda} \sum_{x=0}^{\infty} \frac{(\lambda e^t)^x}{x!} = \exp[\lambda(e^t - 1)]$$

となる。期待値は $E[X] = M'_X(t)|_{t=0} = \lambda$ と求められ, $E[X^2] = M''_X(t)|_{t=0} = \lambda(1 + \lambda)$ より $V[X] = E[X^2] - (E[X])^2 = \lambda$ となる。

[3] Y はパラメータ $\lambda_1 + \lambda_2$ のポアソン分布に従う。

[4] $Z = (X - \lambda)/\sqrt{\lambda}$ のモーメント母関数は $M_Z(t) = e^{-\sqrt{\lambda}t} \exp[\lambda(e^{t/\sqrt{\lambda}} - 1)]$ であり, キュム

ラント母関数 $\psi_Z(t) = \log M_Z(t)$ に対し, $\psi_Z(t) = \frac{1}{2}t^2 + \frac{1}{3!} \frac{t^3}{\sqrt{\lambda}} + o\left(\frac{1}{\sqrt{\lambda}}\right) \rightarrow \frac{1}{2}t^2 \quad (\lambda \rightarrow \infty)$

より Z の分布は $\lambda \rightarrow \infty$ のとき, 標準正規分布に収束することが示される。

数理 4

[1] Z は $N(a, k^2 + 1)$ に従う。

[2] X と Z の相関係数は $R[X, Z] = \frac{k}{\sqrt{k^2 + 1}}$ となる。

[3] Z の確率分布は $N(a + kx, 1)$ となる。

[4] X の条件付き分布は $N\left(\frac{k}{k^2 + 1}(z - a), \frac{1}{k^2 + 1}\right)$ である。

数理 5

- [1] 確率変数 V の確率密度関数 $f(v)$ は、変換 $V=Z^2$ では $\frac{dz}{dv} = \frac{1}{2\sqrt{v}}$ であるので、

$$f(v) = 2\phi(\sqrt{v}) \frac{dz}{dv} = \frac{1}{\sqrt{2\pi}} \frac{1}{\sqrt{v}} \exp[-v/2]$$

となる。

- [2] X と Y の同時確率密度関数 $f(x,y) = \frac{1}{2\pi} \frac{1}{\sqrt{xy}} \exp[-(x+y)/2]$ で変数変換 $s=x/y$, $u=y$

を行うことにより、 S の確率密度関数は $g(s) = \frac{1}{\pi} \frac{1}{\sqrt{s}} \frac{1}{1+s}$ となる。

- [3] 上問 [2] の結果で $s = \tan^2 \theta$ と置くと $g(s)ds = \frac{2}{\pi} d\theta$ となる。 $t = \frac{x-y}{2\sqrt{xy}} = -\frac{\cos 2\theta}{\sin 2\theta}$ よ

り、 T の確率要素は $h(t)dt = \frac{1}{\pi(1+t^2)} dt$ となり、題意が示される。